

ペア給食の実践とその効果

「ペアと一緒に食べる」異学年の交流から

Practice and Effect of pair lunch
Through "Eating together one's pair" between different grades

山下綾子*
Ayako YAMASHITA

金子玲奈*
Reina KANEKO

磯 咲子*
Sakiko ISO

河村美穂**
Miho KAWAMURA

【キーワード】 学校給食 ペア給食 共食 異学年交流

I 研究の背景と目的

第二次大戦後、外国の援助ではじめられた学校給食は、1954年に制定された学校給食法の下、小学校においては重要な教育活動の一つと位置づけられてきた。戦後の食料難の時代には、子どもたちの栄養状態をよくすることが目的とされていたが、食生活の変化にともない、内容や実施方法ともに徐々に変化してきている。

近年では、食育基本法の制定（2005年）、さらに学校給食法の改正（2007年）をへて、学校給食はより食育の実践の場として重視されるようになってきている。

学校給食に関しては、これまでも数多くの実践報告や実践研究がある。食育の実践は、多くの場合、栄養教諭（または栄養職員）とクラス担任が共同して行っており（河村2012）、クラス担任の役割が重視されている。同様に、学校給食におけるクラス担任の役割は大きく、栄養摂取の機会として、食事マナーの指導など多様な教育活動として、日常的に実践されている。

これまでの学校給食に関する実践研究は、食育としての取り組みに関するもの、メニューの開発、子どもたちの栄養摂取状況など多岐にわたっている。ただし、学校給食を子どもたちが学び合う教育の場としてとらえ、実証的に行う実践研究は必ずしも多くない。

本稿で対象とする実践は、2012年度当初に、必要に迫られて始めたものである。一般に4月末の段階で学校給食を初めて経験する1年生にとって、みんなでそろって食べる昼食は、その準備から食べ方、片付けに至るまで未知の出来事であり、スムーズに食べるようになるまでの担任の労力は過重である。これまでも、給食の配膳（または片付け）の場面で1年生の教室に6年生がお手洗いに入るという実践は様々なところで行われている。

今年度は、より多くの人数できめ細やかな指導ができ

るよう、6年生が1年生のお手本となって一緒に食べるというペア給食を実施することにした。本実践のペア給食の特徴は、2つである。

① 年度当初だけではなく定期的にペア給食を実施している。

② ペアを固定し、個人的なつながりを重視する。

本実践は、1年生が給食をきちんと食べるように、という当初の目的を超えて、様々な教育的効果を生むことになった。この効果を、実証的に明らかにすることが、学校給食の実践や、共食を考えるうえで重要と考え、本実践の関係者が集まり、ペア給食について分析的に議論し、共有するという研究活動を行うこととした。

本稿は、以上のような実践研究の経緯から、まず実践の概要について詳述したうえで、当該の児童たちがこのペア給食をどのようにとらえているのかを感想文（6年生）や語り（1年生）をもとに分析し、筆者らが議論した結果を考察することとする。



写真1 ランチルームでのペア給食の様子

* 所沢市立中央小学校

** 教育学部家政教育講座

II 研究方法

本節では、まずペア給食の実践について、実施校の給食について、ペア給食の実施方法について述べた上で、データの収集・分析方法について詳述する。

1. ペア給食の実践

(1) 中央小の給食について

本校は、栄養士が献立を毎月立て自校の給食室で調理する自校給食である。自校給食のよいところは、給食の時間が近づくといいい匂いが校内に漂い、児童が給食をとっても楽しみにすることである。また、児童は早朝から調理員さんが調理をしてくれることを、調理室の窓越しに見て知っており、1月の給食週間には、栄養士や調理員のみなさんへの感謝の集いを実感をこめて行っている。

本校栄養士が献立を立てるときに心がけていることは、食材に地場産の野菜を多く取り入れ食材を身近に感じられるようにすることである。また、中央小の給食が第二の母の味となるよう家庭的な献立を立てることに気を配っている。施設面では、ランチルームを併設しており、1クラス月1回程度、順番に給食をランチルームでとる機会を設けている。ランチルームでは栄養士も共に給食を食べ、栄養指導や食卓でのマナーなどについて給食を通して直接児童に教えている。

また、本校は市内で唯一箸を学校で用意し、給食で使用している。箸の補給費はPTAの予算に組み込まれおり、保護者も児童の食育に携わるようにしている。

(2) ペア給食の実施にいたる経緯

入学したばかりの1年生の給食指導に際し、より多くの人数できめ細やかな指導ができるよう、6年生の力を借りたいと1年生の担任からの申し出があった。1年生と6年生は学校生活の中でも関わりが多いため、6年生の担任は快く引き受けた。

事前準備として1年生と6年生の担任、栄養士間で、ペアの組み合わせや給食時間、片づけ方などの確認を行った。

(3) ペア給食の実施方法

ランチルームの6人掛けのテーブルに、組んだペア同



写真2 1年生と6年生でのおかわりの様子

士で向かい合うように座る。給食をともに食べ会話をしながら、6年生が1年生に食べる時間配分や片付けの仕方などを1対1で教える。回数は月に2回ほどであり、1年生も6年生もペア給食を楽しみにしている。

なお、本稿で対象としているのは、ペアクラス2クラスのうち1クラスである。1クラスも2クラスも同様に効果を上げていると思われるが、感想文などデータの収集は1クラスのみで行った。

2. データの収集と分析

本実践を子どもも自身がどのようにとらえているのかを把握するために、それぞれの学年の児童から可能な範囲でデータを収集した。

第6学年には1学期途中に、それまでのペア給食を振り返って感想を書いてもらった。さらに9月のペア給食後にも同様に書いてもらった。すべての記述を文脈上で区切ってデータ化し、一定のカテゴリーにあてはまる記述のある児童数を数えた。

第1学年は、文章にすることが難しいと思われたことから、9月のペア給食後に担任教員がすべての児童に対して個別に簡単なインタビューを行った。インタビューの様子は、児童に断って録音し、回答は逐語録としてデータ化した。この逐語録については分析対象とするほどには多くなかったことから全体の傾向を把握するにとどめた。

以上の分析データをもとに、筆者ら（6学年担任・1学年担任・栄養職員・本研究のスーパーバイザー）が、1学期終了後、9月のペア給食後と2回の検討会を実施した。

III 結果と考察

本研究では、それぞれ立場の違う筆者らが検討会を通して実践を共有することが可能になった。それぞれの立場が異なることが、本実践を多面的に把握することを可能にしたとも言える。そこで、以下では、1. ペア給食の実際、において栄養士の立場からその様子を詳述し、2. 感想文の分析結果と教員の感じるペア給食の効果、では、感想文のデータ分析の結果等をもとに、ペア給食の効果を学年担任がそれぞれの学年の様子を中心に示すということにしたい。

1. ペア給食の実際：栄養士の立場から

4月からペア給食の取り組みを始めるにあたり、どのように子どもたちが変化していくかとても楽しみにしていた。

6年生は初めて会う1年生に戸惑いながらも、最上級としてお手本にならなくてはいけないという責任感が日に日に表れ、一生懸命に世話をしていた。声かけも言葉は少ないが、一つ一つを選び、どうしたら通じるのか良く考えている様子がうかがえた。1年生は初めて会う6年生であったが、自分たちが何もわからないぶん初めか

ら頼りきっているという感じであった。

年度初めの1回や2回の会食で終わらせることなく、続けて行ったことで子どもたちの表情も和らぎ、信頼関係も作れたように感じる。ランチルームに先に来た学年の児童が、先に座って相手を待つワクワク感が見ているも伝わってきて、「今日は遅いね。」「まだかな?」「早く来ないかな?」「何の授業だったんだろう?」と相手のことを待ち望んでいる姿があった。そして、後から入ってくる学年に手を振り、名前を呼び笑顔たっぷりで相手を迎える姿が微笑ましく感じられる。6年生は、おかわりの順番も1年生を優先とし、自分たちが我慢することを自然と行っていた。これが人間関係を構築することを学ぶことになるのではないと思う。

ペア給食を始め、半年がたち子どもたちの新たな姿が見えてきた。6年生は、自分のペアの好き嫌いや食べるスピード、食べられる量を見極められるようになってきた。苦手なものだと判断すると、食べきれないように早めに声がけをするようになった。1年生は、ちょっと成長した自分たちを褒めてもらいたい気持ちが出てきた。その反面、おかわりの時は一緒に席を立ててもらい、甘えるところも見受けられた。

食卓で同じ食事をとることで、食べ方や食器具の使い方などのマナーを学ぶ場であることが改めて確認できたのではないと思う。6年生が1年生のお世話をする介助の食事スタイルから一緒に食卓を囲む会食のスタイルに変化してきたと思う。

1年生の給食指導を教員主体で行うのではなく、子ども同士で学びあうことで、6年生の責任感の芽ばえや1年生に芽ばえる憧れが、心の成長に大きく反映したと思う。

2. 感想文の分析結果と教員の感じるペア給食の効果

分析結果は、学年ごとに示し、それぞれの結果について、検討会で考察した内容を合わせて示す。

(1) 6年生からみたペア給食

1) 感想(記述)の分析から

6年生児童の感想から分かることは、表1に示したように、1年生はかわいいという記述が数多く見られることである。6年生は男女ともに1年生のことをとてもか

わいく思っている。かわいいと感じていることは、給食を食べる量や片づけの仕方、会話の内容など様々である。そのかわいい1年生が給食をよく食べ、元気に成長してほしいという願いをもって、ペア給食の時には食べる量や早さについて声かけしたり、おかわりがほしいかを聞いたりにしているのではないかと考えられる。

さらに、表1に示したように、1学期当初感想よりも、2学期当初感想の方が、かわいいと記述した6年生が多くなっている。同様に、ペアの1年生がどんな食べ物を苦手としているのか、または好んで食べているのかなど好き嫌いについての記述も多くなっている。このことは、個別の関係を結び、6年生が1年生のペアの様子をずっと見守って給食の時間を過ごしているということの証左であろうと思われる。

2) 教員の感じるペア給食の効果：6年生の成長

学校生活の中で、給食の時間が一番楽しみだと答える児童は数多い。それだけ児童にとり、給食が占める割合は大きい。食べるということは人間の本能であり、空腹であればたくさん食べたいと思うのは当然である。通常の6年生の教室での給食では、あまりがでた献立は各自自分の体調に応じておかわりを自由に行っている。人気がある品物については、少しずつ分けたり時にはじゃんけんをしたりしている。ところが、ランチルームで1年生と共に給食を食べると、6年生は自分が一番におかわりをしたいという欲求をひとまず我慢し、1年生におかわりするかをまず聞くことになる。これにより「お兄さん・お姉さんは1年生のことを一番に考えているんだよ。」という安心感を1年生に与え、それが6年生には最高学年としての自信につながっているのではないかと考える。

小学校6年生の児童に相手のことを考えるという心情は、道徳等で指導しているところであるが、なかなか実践に結び付けるのは難しい。しかし、5歳も歳が離れている1年生を目の前にすると、相手を思いやる状況が自然と生まれる。さらに、学級集団の中で価値観が共有され、行動の仕方も同一方向に向いていることも効果的であると考える。

したがって、今回のペア給食の効果は6年生の成長という視点から考えると

① 1年生に給食のことを教えることを通して、6年生

表1 ペア給食の感想(記述)の分析結果

	具体例(記述)	1学期当初感想	2学期当初感想
ペアへの思い(かわいいという)記述	★1年生が初めて笑ってくれた時はスゴイカワイイなと思いました[1学期] ★わたしのペアは、えがおがすごくかわいくて、そのえがおを見ると、いやなことをわすれてしまいそうで、うれしくなります。[2学期]	5	12
ペアの好き嫌いについての記述	★キラいな物を、さいごにたべようといのこしちゃってるな[1学期] ★デザートにのっているあんずを食べて、顔をしかめていました。苦手なのだと思います。[2学期]	2	10

(人)

に相手を思いやる心情が自然と育ったこと

- ② 集団の中で思いやりの行動が共有され、児童相互に影響しあったこと

ではないかと考える。

(2) 1年生からみたペア給食

1) インタビューの回答から

ペア給食を繰り返したのち、9月のペア給食後にインタビューを行った。質問は以下のとおりである。

- ① 6年生と一緒に食べる給食は、どんな気持ちですか。
 ② なぜ、そう思うのですか。
 ③ どんな、いいことがありますか。

まだ、自分の考えをうまく伝えることができない1年生ではあるが、児童からは「たのしい。うれしい。」という言葉が最初に聞かれた。

2) 教員の感じるペア給食の効果：1年生の成長

年度当初から、1年生は朝自習や掃除、休み時間などたくさんの時間で6年生のお世話になっている。本年度は給食の時間も一緒に過ごすということで、今まで以上に6年生との関わりの時間を持てるようになった。

初めての給食の時間を6年生と一緒に過ごすことで、中央小学校の給食のルールが自然と身についた。通常、担任が時間をかけて指導することを、6年生が優しく声を掛けながら一緒にしてくれることで、1年生は短時間で理解することができたのである。

4月当初は、面倒を見てくれるお兄さん、お姉さんと一緒に食べるだけの給食であったが、回数を重ねるごとに、「ぼくの」「わたしの」お兄さんお姉さんという意識が芽生えてきた。食べるということが苦手な児童も多く、残食量がなかなか減らずにいた。しかし、6年生とのペア給食では、普段はお替わりができない児童が、多数お替わりをすることができた。残食量も少しずつではあるが、減ってきている。これは、6年生の影響が大きいと考える。「ぼくのお兄さんがたくさん食べているから、ぼくも食べてみようかな。」「わたしのお姉さんが、食べられるようになったね。と言ってくれるから、残さないようにしよう。」という思いが生まれてきたのであろう。

インタビュー結果からもわかったが、6年生との給食が楽しい理由の一番は、「おしゃべりができること。」である。どの児童もペア給食は、6年生とお話できることが一番の楽しみになっている。6年生との距離が縮まっていることがわかり、1年生なりにかっこをつけてみたり、話題をふってみたりしている様子が見られてきた。6年生はすかさず、そんな1年生に優しく言葉をかけてくれている。

教室で1年生に対して様々な指導を行う際に、「6年生は、こういうことをしていると思いますか。」と聞くと、「していません。」と答える。ここには、頭だけで考えた答えではなく、身近に感じている6年生の行動を実際に思いうかべて答えているのが分かる。食事を共にするという具体的な営みを通して、6年生と接しているからこ

そ、6年生は「していない。」と断言できるのだろう。また、自分のよくない行いを「大好きな6年生には知られたくない。」という心情があるからこそ、よりよい自分になろうとする気持ちがはぐくまれているのではないだろうか。1年生にとって6年生はお手本であり、あなりたいという目標になっているのである。

また、保護者から「6年生のお兄さんとの時間が、本当にうれしいようです。兄弟のいないわが子にはとてもありがたいです。」という声が聞かれた。この取り組みが保護者にも伝わり、受け入れられているということは、本校の学校給食の実践が家庭にも理解され、今後の食育実践の理解と協力へとつながっていく可能性を示していると思われる。

以上のように、ペア給食の効果を1年生の成長という視点から示すと以下の2点を挙げるができる。

- ① 給食のルールが、短時間で1年生に定着させることができた。
 ② 学校のリーダーの姿を近くに感じることで、こうなりたいという目標ができた。

3. ペア給食の効果の要因

ここまで示してきたように、「1年生が学校給食に慣れて円滑に食事をとれるように」という当初のペア給食の目的を越えて、1年生、6年生それぞれに様々な学びがあった。

縦割り給食など、学校内ではこれまでも異学年の児童が触れ合う機会をつくって実践してきた。しかし、今回の1年生と6年生によるペア給食は、これまでの縦割り給食に比べて、きわめて親密な関係性が形成されたという点が特徴である。また、親密な関係を結んだからこそその教育的効果があったとも考えられる。

なによりも、その効果の要因として考えられるのは、ペアという固有の相手がいる、ペア給食のたびに再会し交わるということである。6年生はたとえば、「ぼくのペアは話がすすみすぎて給食をまったくすすまないの『食べおわるまでしゃべらない。』と言うとすごいスピードで給食を食べていきます」「私のペアは、前と比べて、給食をたべおわるのが早くなっていました」というように、僕のペア、私のペアとして1年生を認識している。だれでもない私のペアの1年生なのだという関係の作り方が、かわいいという感情を育み、どんな食べ物が好きなのか、嫌いなのかをよく理解するという事になったのだと思われる。これは、6年生という発達段階の児童にとっては、見守る相手がいる、その相手から頼られて責任感を自然と持つことにより成長を果たすということになっていると考えられる。また、最高学年の6年生が校内で最年少の1年生の面倒をみたということ、つまり、1年生が小さくてまだなにもわからない状態であることもプラスに作用している。たとえば、「今日のデザートはフルーツエッグで、(あんず)を食べた時、顔がどや

顔になりました。それを見たぼくはかわいいなと思いました。あの顔は、わすれられません。とてもかわいかったです。」という感想にあるように、見ていただけでかわいいという親愛の感情をもつようになっている。

一方1年生も、6年生のことを自分の「ペアのお兄さん、お姉さん」というふう認識している。そして、ペアのお兄さんまたはお姉さんの一挙手一投足を見ながら給食という時間に慣れてきたのである。6年生というモデルを見て成長するということが1年生にとっては大きな学びになっているのであろう。

今回、ペア給食の効果があつたもう一つの要因として、食事場面で関わるという共食の機会であつたことも挙げられる。食べるという行為は、その人の性格や生活の様子が見えやすいものである。また、回を重ねて交流を繰り返したことによって、ペアへの理解を深め、ともに安心して食事をとることができるようになったのだと考えられる。「フルーツエッグの杏子が食べにくそうだった」「学校の給食のお茶は、とってもにがかったらしく、とってもにがそうなかおをして、やさいをいっしょにのんでいました」「ほうれん草がかみきれなかった」「〇〇君（ペアの1年生）は最初、牛乳に苦戦していました。けど、今日、久しぶりに会ったら給食を食べるのがすごく早くなっていてびっくりしました」など、6年生は1年生の様子を見ながら、ペアの思いをくみ取り、なにが苦手なのかを理解し、成長の様子までも理解するようになっている。1年生という言語による表現が十分にできない子どもであっても、個別に関わりその言動に丁寧に接することによって、理解して励ましたり、促すことが可能になるということを身をもって学んだのではないだろうか。

IV 今後の課題

本実践は、年度末まで実践の予定である。今後も担当教員全員で、注意深く見守りながら、個々の児童が成長する機会をつくっていきたいと考えている。

なお、今後の実践で再考したい点としては、

[1] 卒業を控えて6年生が自身の成長を自覚し、さらにできることを考えるような機会をつくること。

[2] 1年生が自立へのステップを歩むような働きかけをしていくこと。

である。

これまでになく親密な関係を結んだ1年生と6年生が、それぞれの存在を大切にしながらも、それぞれに自立し、成長できるような実践へと段階を踏んで発展させていきたいと考えている。

また、この実践を本校の特徴ある教育活動として、保護者にも伝え、その他の食育実践と連携させていきたい。

参考文献

河村美穂2012, 「食育実践事例分析」『調理技能の習得を中

核とした家庭科食生活教育カリキュラムに関する実践的研究』(科学研究費・基盤研究(C)による助成研究・報告書)